
新たな物語

ルマンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たな物語

【Nコード】

N9975N

【作者名】

ルマンド

【あらすじ】

強い想いがあれば、願いは叶う。齋藤 さいとう 晃 あきらが迷い込んだ世界はペルソナ3の世界。

晃は物語の結末を変える事が出来るのか。

monogatari No. 0 プロローグ（前書き）

初めて書く小説なので間違った所など多々あると思います。内容も自信がないので了解した上でお読み下さい。

monogatari No. 0 プロローグ

―風の声光の粒まどろむキミにそそぐ―

暗い部屋で流れるエンディングテーマ。

・・・「キミの記憶」この曲を聴くのはもう何度目だろうか。
持っていたコントローラーを床に置き、僕はハーツと溜め息をつく。

（また・・・救えなかったな。）

何度も繰り返すエンディング、そして同じ結末を迎える主人公。

「なんとか救ってやれたらな・・・」

つぶやくと同時にふと時計を見ると、針は11時36分をさしていた。
た。

（もう寝るかな）

晃はそのままソファーにもたれかかり、まぶたを閉じた。

・・・ガタ・・・ガタン、ガタン。

晃はふと自分の体がゆられている事に気付き、目を覚ました。

（ここは電車・・・かな??）

窓から見える外の景色は次々に左へ流れていた。

周りを見渡すと、乗客は自分以外に一人。

その乗客はヘッドホンを耳につけて窓の方を見つめていた。

(・・・あれ??)

今起こっている事態を冷静に考えている内に、晃は異常に気が付いた。

それもそのハズで、さっきまで晃は自分の部屋で「ペルソナ3」をプレイしていたのだ。

それが何故今、自分が電車に乗っているのか。

どう考えてもおかしすぎる。

手を思いっきりつねったが、普通にヒリヒリと痛む。

「今起きているコトは夢」という選択肢が消えた。

(夢じゃない・・・?)

悩めば悩むほど理解に苦しむ。

悩んだ末とりあえずここはどこなのか、電車はどこへ向かっているのかを把握するために、乗客に聞くコトにした。

(聞こえるかな？音漏れしてるけど。)

乗客は外の方を見ているうえに曲を聴いている為、気が付いてくれるかどうか分からない。

仕方無く肩を軽く叩いて声をかけた。

「あのーすいません。」

呼びかけた相手が振り返る・・・それと同時に晃は今起きている事を少し理解できた。

自分が今、置かれている状況を。

「はい？どうしましたか？」

と言って振り返った相手。

それはあのゲームの主人公。

有里 湊であつた。

monogatari No. 0 プロログ（後書き）

注意… 晃は物語のストーリーを忘れてしまっています。物語が進んでく上で思い出させていこうと思います。

感想、要望、指摘なども出来れば貰えると嬉しいです。

m o n o g a t a r i N o . 1 W e l c o m e t o s h a d o w t :

前回の話で出てくる言葉に間違えがありました。

電車ではなくモノレールですねw

大変失礼しました。

目の前にある湊の顔を見て、衝撃を受ける。と同時に晃はある仮説を立てていた。

ここはペルソナ3の世界ではないかと。

根拠？それは今のこの状況が自分さえ居なければ、あのゲームとそっくりだというコトだ。

そしてなにより、今ここに湊が存在していることだった。

「えっ・・・と・・・」

あまりの衝撃に晃は言いかけた事がなんだったのかを忘れてしまう。すると、湊の方から話しかけてきた。

「その制服・・・もしかして君が齋藤晃さん？」

「え？ああ、そうだけど」

何故湊が自分の名前を知っているのだろうか。

「やっぱりそうか、僕はこれから君と同じ寮生になる有里？湊。

よろしく」

そう言って手を差し伸べてきた。とりあえずその手に応えるように晃も手を差し出す。

ー同じ寮生？？どういう意味だ？

手を握りあったものの、なんの事だかさっぱり分からない。

思い切って聞く事にした。

「えーと、その・・・寮って・・・？」

「へっ？月光館学園の巖戸台寮の事だけど・・・もしかして人違い？」

「あっ、ごめん。人違いじゃないから。」

急いで訂正する。

整理してみると、つまり自分は巖戸台寮に入ったという事だろうか。

あの特別課外部に。

なら自分もペルソナを使えるのだろうか。ちよつとした期待が膨らんでいった。

しばらくすると、アナウンスが流れてきた。

「次はー巖戸台、巖戸台です。」

「そろそろ着くな、ん？ 君荷物は？」

そう言われてみれば、荷物が無い。あるとすればポケットにある切符と財布、そして携帯だった。

「ずいぶん身軽だね」

確かにその通りである。

この先やっていけるのか心配になってきた。

「巖戸台、巖戸台です。お乗り忘れのないようご注意ください。」

二人はモノレールを降りた。

「随分遅くなっちゃったなー」

湊が何時にモノレールに乗ったのかは分からないが確かに遅くなってしまったのだろう。

時計を見ると、もうすぐ0時になろうとしていた。

カチッ。

0時になった。

「「・・・！！？」」

何が起きたのだろうか。

蛍光灯の灯りは消え、切符売り場の画面も消えた。

そして、不気味な棺桶のオブジェとそれと同じ位に不気味な月。周囲の雰囲気明らかにおかしい。

「これ・・・普通なのかな・・・」

晃が問う。

「どうだろうな．．．」

湊が答える。

警戒しながら二人は歩き出した。

そしてなんとか．．．

晃と湊はどちらも気を緩める事無く、寮までたどり着いたのであった。

m o n o g a t a r i N o . 1 W e l c o m e t o s h a d o w t :

何かまわりと比べると内容が短い気がするのは気のせいでしょうか？

monogatari No. 2 入寮と契約（前書き）

なんか内容が暗い感じになっていますが、学校とかに通う辺りに明るくしていこうと思います。 m (|) m

monogatari No. 2 入寮と契約

monogatari No. 2

晃と湊の二人は寮へとたどり着いた。

しかし、そこまでの道のりにかかった時間を相当長く感じただろう。二人ともこれまでの人生で一番集中したように感じるほど、警戒していた。

これまでの人生といっても、たった16年ほどしか過ぎていないのだが。

二人は妙に静かな夜道を歩いてきたせいかな、ここまで無言だった。

「ここでもいいのかな？」

二人の沈黙は湊の一言で破られた。

確かに”月光館学園 巖戸台分寮”と建物に書かれている。

しかし、建物に明かりはついていない。

お構いなしに建物に入っていく湊に驚きを感じつつも、晃も続いていた。

建物内は明かりがないために薄暗い。

すると突然、横から声をかけられた。

「ようこそ。」

声がした方に振り向くと、そこには1人の小さな少年が立っている。

――たしかこの子は……

晃は何処かで会った気がしていた。

「遅かったね。長い間、君達を待ってたよ。」

少年は、一枚のカードを手に使っていた。

「この先へ進むなら、ここに署名をして。一応、”契約”だからね。」

湊と晃は顔を見合わせた。

入寮するためのサインだろうか。

「怖がらなくていいよ。ここからは、自分で責任をとってもらうっただけだから」

「ー自分で責任を？」

カードにはメッセージが書かれている。

”我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん”

・・・それと署名の欄。

入寮のサインとしてはおかしい。

しかし、書けと言われた以上、書くという選択しかなかった。

湊が先に書き終えた後、晃がペンを取り署名しようとする、もう欄がなかった。

「これって欄が一つしかないけど・・・？」

晃が少年に質問すると、少年は驚いた様な顔をした後、晃をジッと見つめた。

「「・・・??」」

晃と湊が不思議にその様子を見てみると、少年はとても小さい声で「別世界の人か・・・」と呟いた。

湊だけがそれを聞き逃さずピクリと反応する。

「とりあえず空いているところに。」

テキトーだなと感じつつも、齋藤 晃としっかり署名した。

「・・・確かに。」

そういうと晃達に改めて体を向き合わせた。

「時は、誰にでも結末を運んでくるよ。たとえば、耳と目を塞いでいてもね。・・・さあ始まるよ。」

そう言い残したまま、少年は闇に溶けるように消えてしまった・・・

monogatari No. 2 入寮と契約（後書き）

最近ペルソナ3の小説が増えてきたように感じます。
なんかやっついていけるのか不安になります。

（T ^ T）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9975n/>

新たな物語

2010年10月9日05時32分発行